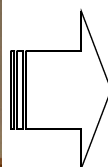


特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくり ～「本時の見通し」をもつ～ 2

複式学級では、子供たちが主体となって活動できるよう「授業の流れ」が提示されているという話を前回しました。今回は、各教科で本時の見通しを持たせるためにはどのような工夫があるか紹介します。前回、小学校の複式学級は全ての教科で授業を進められるよう、「授業の流れ」に示されている言葉は、どの教科でも使える学習活動を示すものでした。中学校は、教科の専門性を伴うことから、教科に応じた授業展開に合わせた本時の見通しを作成する必要があります。



この写真は、有田の小学校で教職経験5年目ぐらいの教員が行った算数授業の様子になります。一般的な算数授業の展開を思い浮かべてみてください。算数は、たいてい「課題提示」(今日は、この問題を考えます。) → 「個人解決」(では、一回自分でこの問題を解いてみましょう。) → 「集団解決」(では、みんなでこの問題の答えを考えます。) → 「まとめ」(こんな問題の時は、このように考えると解くことができますね。) → 「練習問題」の流れになっています。算数では、他の教科と違い「個人解決」や「集団解決」「練習問題」がたいていの授業で使われる場面になります。教科の特性を象徴した場面となるわけです。このように、教科によって必要な授業の流れがあり、それを提示することによってその教科に寄り添った授業の流れを提示することができます。子供たちにとっては、この教科の時にはこんな授業の流れで進められていくんだという見通しが立ちやすく、安心して授業に臨むことができるのだと考えられます。このように、教科の特性に応じた授業の流れを提示することで、常に一般化された授業の流れを感じ取ることができ、その教科に応じた活動を子供たちがスムーズに臨むことができるのです。中学校ではどのような流れがあるのか、次回いくつか紹介してみます。